

目的 寝具選択の際に、従来、行なわれている主観的評価の妥当性について検討するために、手ざわりによる主観的評価と、体動測定による客観的評価との関連について検討を行なった。

方法 実験用寝具（敷布団）として、次の6種の中綿を使用している市販寝具を用いた。すなわち、ポリエステル（ダブル層）100%、ポリエステル（シングル層）100%、ウール/ポリエステル 50/50%、綿/ポリエステル 50/50%、綿 100%、ポリウレタン 100%である。[I]主観的評価方法：127名の女子学生による官能検査（手ざわり）を行ない、成績を順位配列法により処理した。[II]客観的評価方法：127名の女子学生の中からランダムに選んだ4名の被験者による終夜睡眠実験を実施し、体動を、屈曲起電力法により測定した。成績は、めざめ感の良否と関連を持つ、1時間あたりの体動数および最大静止時間の2項目について処理した。[I][II]共、1982年、冬季に行なった。

結果 1.主観的評価において、好みの順位は、綿>ウール/ポリエステル>ポリエステル（ダブル層）、および、綿/ポリエステル>ポリウレタン>ポリエステル（ダブル層）>ポリエステル（シングル層）の順となった。2.客観的評価において、めざめ感の良い寝具の順位は、ウール/ポリエステル>ポリエステル（ダブル層）>綿、および、ポリエステル（シングル層）>ポリウレタン>綿/ポリエステル>ポリエステル（ダブル層）の順となった。

この結果、寝具の評価を合理的に行なう方法についての検討が必要であると思われる。